

デジタル放送時代のメディア教育を探る

——映像制作指導の現状と課題——

析窪優二

亀井美穂子

1. はじめに

日本のテレビ・メディアはデジタル放送時代に突入し、地上波テレビは2011年7月にアナログ放送を停止する。こうしたテレビ放送のデジタル化が進展するなかでメディア教育の現場、なかでも映像制作分野では、教育設備のデジタル化が立ち遅れて、テレビの制作現場と大学の教育現場とは大きな格差が生じている。本学ではいち早くハイビジョン制作可能なノンリニア編集設備を導入したが、スタジオ設備のデジタル化が大きな課題となっている。

こうしたなか本学文化情報学部では3専攻制がスタートしたのにもない、2007年度からメディア情報専攻の学生を対象に、テレビ番組や映像コンテンツの制作を指導する「スタジオ制作」や「マルチメディア演習（析窪担当）」などの授業を開講した。これらの授業はメディア棟にあるテレビスタジオを使って著者（析窪）が担当しており、今年度で開講3年目を迎えた。こうした映像制作関連科目は、全国的に見ると比較的珍しい科目ではあるが、メディア系学部ではそれなりに開講例は多い。しかし指導内容は大学の教育設備や教員構成等によって様々で、その狙いや効果はそれほど明確になっていないのが現状のようである。

3専攻制に移行してから、メディア情報専攻の学生のなかには、こうした専門科目を履修したあと、卒業研究で本格的なドキュメンタリー作品や

情報番組を制作するケースが増えている。テレビなどマスコミ関連の仕事をめざして就職活動をして、実際に映像プロダクションやCATV局に就職した学生もいる。

そこで本稿では、スタート3年目を迎えた本学における映像制作指導について、「スタジオ制作」と「マルチメディア演習（析窪担当）」の授業をモデルに、実際の指導状況や受講生アンケートをもとに報告し、独自開発したカメラ撮影とノンリニア編集を指導する教材ビデオの活用も含めた教育の現状を総括した。そしてこうした本学の現状を踏まえて、デジタル放送時代における映像制作を中心としたメディア教育の課題や将来像について展望を試みた。

2. テレビスタジオにおける映像制作指導

メディア棟にあるテレビスタジオ（スタジオフロア+副調整室）を使った授業は「スタジオ制作」と「基礎演習B」が開講されている。「スタジオ制作」はスタジオ番組制作の基本を指導する授業で、前期1クラス、後期2クラスの合計3クラス開講している。1クラスの定員は26人、対象はメディア情報専攻の2年生以上で、選択科目であるが今年度は対象学生の約9割が履修している（写真1・写真2）。

「基礎演習B」はメディア情報専攻の2年生を4グループに分けてオムニバス形式で行っている必修科目で、スタジオでの授業3回でVTRを

使ったスタジオ番組を制作する。ここでは入門コースとして開講している「スタジオ制作」について報告する。



写真1 「スタジオ制作」授業（スタジオフロアー）



写真2 「スタジオ制作」授業（副調整室）

「スタジオ制作」の狙いは、テレビのスタジオ番組を制作するための基本を学ぶことである。カメラマン、音声・ミキサー、スイッチャー、ディレクター、アナウンサー、出演者など全てのポジションを学生がローテーションで体験する内容である。授業内容は表1の通りである。

授業では最初にスタジオ設備の使い方や制作スタッフの役割を指導したあと、受講生を2つのグループに分けて、グループ（12～13人）ごとに出演者からディレクター、技術スタッフまで全ポジションを学生が担当して実際に番組を制作する形で進めている。

どのような番組を制作するかという企画や、担当ポジションも学生たちがグループ内で決めて、

番組制作に取り組んでいる。その上で、番組制作終了後に教員がポイント指導を実施して、学生自身が疑問に感じたり、迷ったりしたことを効果的にアドバイスしている。通常の講義とは異なり、演習的な要素を多く取り入れたユニークな授業である。

表1 「スタジオ制作」授業のシラバス

1回目	ガイダンス、スタジオ設備の概要
2回目	技術スタッフの役割、基本操作
3回目	番組制作体験、ポイント指導
4回目	演習番組①企画、スタッフ決定
5回目	演習番組①リハーサル
6回目	演習番組①本番収録・反省会
7回目	ポイント指導、演習番組②企画
8回目	演習番組②リハーサル
9回目	演習番組②本番収録・反省会
10回目	ポイント指導、課題番組の企画
11回目	課題番組①リハーサル
12回目	課題番組②本番収録・反省会
13回目	課題番組②リハーサル
14回目	課題番組②本番収録・反省会
15回目	まとめ・レポート提出

授業の最終回では、受講者を対象にアンケート調査を実施している。08年度後期と09年度前期の計3クラスの結果（有効回答64人）を見ると、Q1「授業を履修した理由は？」（複数回答可）では、「テレビに関心や興味がある」は47人、「映像作品を制作したいから」は41人、「マスコミ（テレビ）関係に就職したいから」は34人という順で回答が多かった。

Q2「この授業を履修して良かったか？」では、「良かった」は63人、「まあ良かった」は1人、「どちらとも言えない」「あまり良くなかった」「良くなかった」は0人で、ほとんどの学生が履修して良かったと受け止めている。

またQ3「授業内容に満足したか？」では、「満足した」は62人、「まあ満足した」は2人、「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「満足していない」は0人という結果であった。

「スタジオ制作」は実際にスタジオで番組制作演習が課せられる授業である。このため興味の無い、やる気のない学生にとっては、講義科目と比べると面倒で負担が多い授業だ。しかし学生アンケートから分析すると、メディア情報専攻の学生は、それなりにテレビ・メディアに関心を持っていて、こうした授業が開講されていることや授業内容を高く評価をしていることが浮き彫りとなった。このことは09年度アンケートの自由記述欄に「スタジオがあるので文化情報学部に入學した」「この授業を受けたくて相山に入學した」と書いている学生が何人かいたことから裏付けられる。

一方、教員の視点で評価すると、「スタジオ番組制作の基本を学ぶ」という授業の狙いは、十分に達成されていると思う。学生たちは短時間の授業でテレビ番組の制作を楽しく学んでいて、学習の到達度は一定レベルに達している。こうした授業を開講するにはスタジオ設備が必要であるが、メディア棟にある3CAM対応のスタジオは教育上必要な最低限の設備は備えられている。テレビ局で番組制作経験がある教員が、テレビ局と同じようなスタジオ環境で学生を指導しているメリットは大きい。また既存の教育設備を最大限に活用して、大学として特色を出せる授業を実践している点でも評価できると考えられる。ただしこうした指導をしたからと言って、テレビ番組を自由自在に制作できるようになる訳ではない。映像制作の主流は野外ロケ・VTR編集による番組制作なので、あくまでも入門コースと捉える必要がある。

3. ハイビジョン番組の制作指導

「スタジオ制作」を履修した学生のなかで、さらに映像制作を勉強したいという学生を対象に「マルチメディア演習(桁窪担当)」という演習科目でハイビジョン映像によるVTR番組制作を指導している(写真3・写真4)。

この科目は3年前期の開講で1クラスの設定は15人、スタジオの映像編集室を使って指導している。今年度は2クラス、合計27人が受講した。

授業はコンピューターを使ったノンリニア編集(映像編集ソフト:カノープス EDIUS Pro5/EDIUS Pro4)の使い方を中心にゼミ形式で進めている。受講生3人が1グループとなってミニ番組(2分~3分)の制作を課題にしている。番組の企画、野外ロケ、編集、音声処理、字幕スーパー

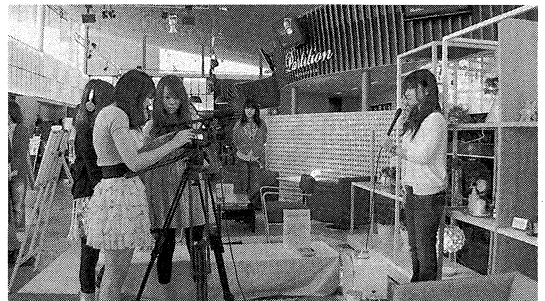


写真3 「マルチメディア演習」野外ロケ



写真4 「マルチメディア演習」ノンリニア編集

処理などをテレビ局と同じような制作手法で行なうことを基本に指導している。

この演習では、最初の授業3回で長さ1分の短い練習用リポートを受講者全員がリポートし、その映像を自分で編集して制作することを第1の課題としている。これにより野外ロケによるVTR番組制作の流れとノンリニア編集の基本的な使い方をマスターする。そのあとグループごとに課題作品を企画し、実際に野外ロケをして、ノンリニア編集で映像編集・仕上げをして、ハイビジョン作品を制作する。授業内容は表2の通りである。

表2 「マルチメディア演習」 シラバス

1回目	ガイダンス、番組制作の流れ
2回目	練習用リポートの撮影・映像編集
3回目	練習用リポートの音声・字幕処理
4回目	課題作品の企画、グループ分け
5回目	撮影台本の作成、取材打合せ
6回目	取材・撮影、リハーサル
7回目	取材・撮影、本番
8回目	ノンリニア編集・映像編集
9回目	ノンリニア編集・映像編集
10回目	完成台本の作成、ナレーション収録
11回目	ノンリニア編集・音声処理
12回目	ノンリニア編集・字幕スーパー処理
13回目	作品の仕上げ
14回目	コンテンツの分析と評価
15回目	まとめ・発表会、リポート提出

この演習科目は課題作品に条件を付けていることが特徴である。大学（学部）の公式ウェブサイト等で公開することを前提に作品を企画・制作することを求めている。このためテーマは単なる興味や思いつきだけでなく、公開サイトの趣旨に沿った内容を企画することが必要になる。またインターネットで作品を公開する以上、ある程度のクオリティが求められる。そのため「良い作品」

を制作するにはどのようなことが必要なのか？という視点で教員は徹底した指導を進めている。完成度の低い作品は公開しないことにしているが、これまで公開できなかった作品はなく、今年度は大学の文化情報学部サイト¹⁾で4本、中部電力「デザインの間」サイト²⁾で5本の映像作品を公開して頂いた。

授業の最後で受講生を対象にしたアンケート調査を実施している。09年度アンケート（有効回答27人）のQ1「野外ロケによる映像制作の流れは理解できたか？」では、「理解できた」は18人、「ほぼ理解できた」は8人、「理解できていない」は1人で、ほぼ全員が理解できたようだ。Q2「ノンリニア編集の基本操作は理解できたか？」では、「理解できた」は3人、「ほぼ理解できた」は23人、「あまり理解できていない」は1人という結果であった。Q3「完成した課題作品の自己評価は？」では、「大変満足している」は16人、「満足している」は11人、「普通」「やや不満」「不満」は0人であった。またQ4「授業の内容や進め方はどうでしたか？」では、「大変満足している」は20人、「満足している」は7人、「普通」「やや不満」「不満」は0人だった。

野外ロケによるハイビジョン作品制作は、企画、撮影、リポート、ノンリニア編集など広範囲なスキルが求められる。こうした専門性や経験が求められる内容を授業15回で指導するのは極めて難しいことである。しかしながら学生からは授業に対し高い評価を得られていることが確認³⁾できた。

教員の視点で評価すると、当初は初心者が週1回の演習科目でインターネット公開するレベルの映像作品を制作するのは難しいと想定していた。しかし実際に指導してみると、企画、撮影、編集、音声処理、字幕スーパーの各プロセスで教員が的確に指導すれば、ある程度のクオリティは維持できることがわかった。具体的には各作業ポイントで授業が終わった後、次の授業までの間に台本の

添削、映像編集の手直し、音声・字幕等の修正等を教員が行うことが必要になる。こうした指導は教員にとってテレビ制作現場のデスク・編集長と同等の技量が求められる。教員の負担は極めて大きい。今後、受講希望者が増加した場合は、教員スタッフ等の新たな対応が必要になると考えられる。大学における映像制作指導で重要なのは、この演習科目の開講により学生が卒業研究で本格的なドキュメンタリー番組などの制作に挑戦することが可能になったことである。

4. カメラ撮影の指導

「マルチメディア演習」や「卒業研究」で映像制作に取り組む場合、カメラ撮影が的確に出来るか、という点が重要なポイントになってくる。企画・構成が良くても、編集が上手くできても、カメラ撮影がダメならば、良い作品は制作できない。しかしながら文化情報学部は、カメラマンの養成を目的にしている訳ではないので、カメラ撮影を専門に指導する科目は開講されていない。このため初心者向のカメラ撮影の方法を指導する簡単な教材が必要だと判断して、独自に教材ビデオ「カメラ撮影と野外ロケ」を開発・制作して学生の指導に活用している。(写真5・写真6)



写真5 教材ビデオ「カメラ撮影と野外ロケ」冒頭



写真6 教材ビデオ「カメラ撮影と野外ロケ」本編

教材ビデオ⁴⁾は全体の長さが28分、全体を12の章に分けて、指導項目ごとに学生が必要に応じて自己学習できるように構成した。その内容は表3の通りである。

表3 撮影教材ビデオの構成(28分)

①はじめに	1分50秒
②カメラの性能を確認	1分40秒
③カメラ撮影の基本	2分20秒
④ショットサイズ	2分40秒
⑤カメラワーク	3分00秒
⑥カメラアングル	2分00秒
⑦人とカメラの距離	2分10秒
⑧野外ロケの基本	2分50秒
⑨編集を意識した撮影	2分30秒
⑩出演者が複数の場合	2分45秒
⑪効果的な手持ち撮影	2分00秒
⑫まとめ	1分55秒

この教材ビデオは「マルチメディア演習」の最初の授業で受講生に紹介し、学内のeラーニングシステム Web Class で学生が自由に見られるようにしている。カメラ撮影は高度のテクニックが求められるので、専門教育を受けていない学生が実際に使える映像を撮影できるようになるのは、かなり難しいことである。したがって、この教材

ビデオは、カメラ撮影を学ぶスタートラインに立てる段階まで学生を導くことを現実的な目標としている。実際の指導状況を見ても、学生にカメラ撮影に必要な最低限の指導をすることは重要で、この撮影教材ビデオの役割は大きいと考えられる。この教材ビデオは科学研究費補助金による研究成果（代表研究者 栢窪優二、分担研究者 亀井美穂子）の一部である。

5. ノンリニア編集の指導

野外ロケによる VTR 番組を制作する場合、コンピュータで映像を編集するノンリニア編集システムを使うことが前提となる。現在、スタジオの映像編集室にはハイビジョン対応のノンリニア編集システム・カノープス（EDIUS Pro 5 と EDIUS Pro 4）が合計 12 式ある。この編集システムは日本のテレビ局で最も採用例が多いソフトウェアを使っている。こうした最新のプロ用ノンリニア編集を 12 式も使って、学生に映像制作をアクチュアルに指導している大学は全国でも珍しい。したがって本学の場合、スタジオ設備はデジタル化という大きな課題を抱えているものの、次世代の映像制作ツール・ノンリニア編集を使った映像制作指導については、このクラスの大学・学部としては全国に誇れる教育環境を整えているといえる。

このノンリニア編集は、設備導入費用が安く、編集機能は優れているが、使い方が難しいという難点がある。そこでノンリニア編集の使い方をわかりやすく指導する教材ビデオ⁵⁾を独自に開発した。（写真 7・写真 8）

教材ビデオは全体の長さは 27 分ほどで、全体を 15 の章にわけてあり、その指導内容は表 4 の通りである。この編集教材ビデオも学内 e ラーニングシステム Web Class で学生が自由に見られるようにしている。



写真7 ノンリニア編集の教材ビデオ 冒頭

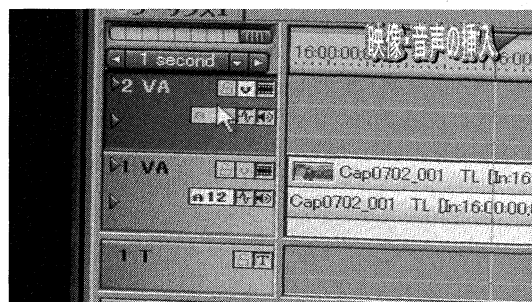


写真8 ノンリニア編集の教材ビデオ 本編

表 4 ノンリニア編集教材ビデオ構成 (27分)

①オープニング	47秒
②ノンリニア編集の特徴	56秒
③編集の流れ	2分09秒
④編集ソフトの起動	1分50秒
⑤撮影素材のキャプチャ	1分34秒
⑥編集作業の開始	2分03秒
⑦タイムライン編集	2分09秒
⑧映像・音声の挿入	2分30秒
⑨映像効果の設定	1分34秒
⑩音声レベルの調整	1分14秒
⑪字幕スーパーの挿入	1分41秒
⑫完成作品をテープに録画	3分32秒
⑬ブロック編集	1分21秒
⑭マルチカム編集	40秒
⑮まとめ・エンディング	52秒

この教材ビデオも「マルチメディア演習」授業の冒頭で撮影教材と一緒に受講生に紹介している。受講生が事前に予習してから、実際の編集作業に臨むと、その学習効果は大きい。また制作の途中でノンリニア編集の使い方がわからない場合に、教材ビデオを見て自己学習することも可能である。

6. 情報通信技術活用の映像制作指導

映像制作指導を実践する際に見逃せないのは、最新の情報通信技術を積極的に活用すると教育内容の充実を図れることである。これまで報告した撮影と編集の教材ビデオは、学内 Web Class で学生が自由に自己学習できる環境を整えたことで⁶⁾大きな教育効果が得られている。(写真9・写真10)

今年度は Web Class 「析窪・卒業研究コース」で本学オリジナルの教材ビデオのほかに、前年度までに学生が制作した映像作品をサンプルとして見られるようにした。これにより学生が同じ長さの、同じようなジャンルの作品を企画する場合に参考映像として容易に活用できるようになった。

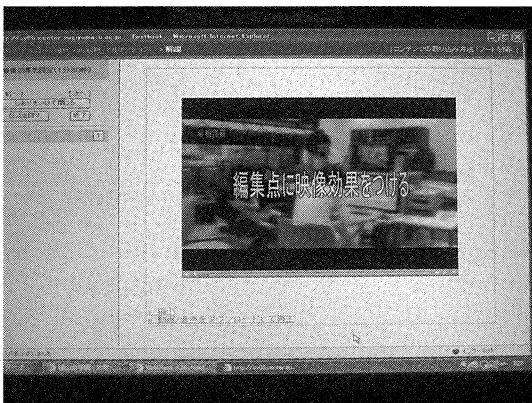


写真9 Web Class・教材ビデオ視聴画面

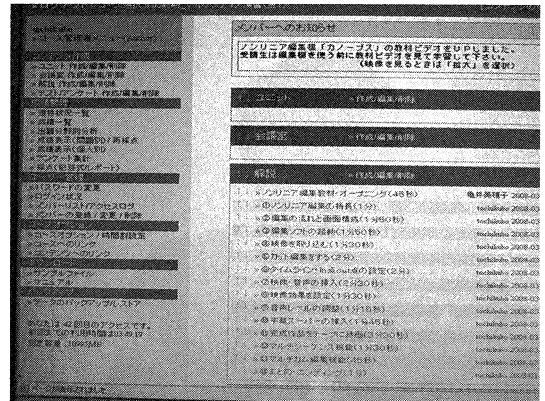


写真10 Web Class・受講生の学習履歴画面

情報通信技術・コンピューターを使ったノンリニア編集では、従来のテープ編集に比べて、編集箇所の修正や追加が極めて簡単にできるというメリットがある。したがって荒編集を本編集に修正する際に、撮影カットの選択や処理に迷ったときは、とりあえず暫定の処理をして、あとで全体像が明らかになってから再度修正するなど、これまでの映像制作の常識を覆す手法で制作することが出来るようになった。

またノンリニア編集の最新機能には、初心者が活用すると制作作業に極めて効果的なものが多い。その代表的な機能はブロック編集である。カノープス EDIUS の場合は、長い作品を編集する際はシーンごとにブロック編集して、それを統合して完成版にする「マルチシーケンス機能」を備えている。これは初心者の編集作業では大変便利で、編集作業の効率化や修正作業の安全性で優れた機能である。こうした最新技術を活用することで、映像制作の手法や流れがより効率的になり、初心者でも優れた作品を容易に制作できる環境を整えることが可能となっている。

一方、映像作品の活用という点でも大きな変化が出ている。これまではテレビで放送し、テレビモニターで作品を見せることが、映像作品の一般的な活用方法であった。ところが最近ではインター

ネットで映像公開することが容易になり、映像作品の発表の場として積極的に利用されるようになってきた。企業や行政などのウェブサイトでは宣伝や広報のためにCM映像や広報映像を公開するサイトが急速に増えている。テレビ番組も全てではないが、放送後にインターネットで見ることが可能なケースが増えている。こうしたことから大学などでもインターネット上で他のメディアと競合しながら制作作品を公開し、コンテンツ制作を競うことが出来る環境が整ってきたと思う。映像コンテンツの評価は視聴者が行うもので、テレビ局が作ろうが、学生が制作しようが、優れた作品は正しく評価されるようになってきた。大学で学生がテレビ局や映像プロダクションと同等の優れた作品を制作して、それを公開することが可能な時代に変化したこと。これが教育機関で映像制作指導を実践する上で、今後の重要なポイントになると考えられる。

7. 今後の課題

本学における映像制作指導の現状を報告してきた。スタート3年目の現時点では、限られスタッフと予算で取り組んできた教育実践としては一定の評価ができる内容だと思う。その一方で、急速に変化するテレビ・メディアのデジタル化に向けた対応も大きな課題となっている。本学スタジオの場合、ここ1～2年でハイビジョン対応のノンリニア編集設備の導入は進んだが、スタジオフロアと副調整室はアナログ放送対応の古い放送設備のままで、アナログ放送停止の2011年までにデジタル化への対応が迫られる。

こうした状況のなかでスタジオ設備のデジタル化を考える場合、このスタジオを大学教育でどのように活用するのか？ という点が重要なポイントになる。スタジオ設備は小規模な設備でも導入費用が5000万円程度は必要になるので、「費用対

効果」を考慮して過剰投資を回避しなければならない。こうした点に配慮して、本学におけるこの3年間の映像制作指導の現状と課題をもとに、本学に求められるデジタル対応スタジオ設備の役割を分析・検討した。その結果、①映像制作指導のなかで「スタジオ制作」授業は入門コースの指導であること、②将来、メディア情報を専門に学ぶ学科・学部等が増設された場合でも「スタジオ制作」授業の内容は「テレビ制作」の入門コースになること、③映像制作の軸は「野外ロケ+ノンリニア編集」によるVTR作品であること（スタジオ・編集室にすでにハイビジョン対応ノンリニア編集システムを導入済みなので対応可能）、④VTRフォーマットは、現行のハイビジョン制作と同じHDVが望ましいこと、などが検討ポイントにあげられる。

こうしたことを総合的に判断すると、スタジオ設備は必要最低限の機能を備えた基本機能に限定したデジタル（ハイビジョン）設備にして、設備費用を軽減する形で導入することが求められると考えられる。具体的な基本条件を表5にまとめた。

表5 デジタル対応スタジオ設備の基本条件

①スタジオ仕様ハイビジョンカメラ3台
②カメラ・フォーカス/ズームデマンド付き
③カメラ・外部ビューファース付き
④スイッチャーは最低8入力
⑤映像はHD-SDI処理
⑥字幕スーパー表示機能（CG）は必要
⑦VTRはHDV 2台、録画・再生で使用
⑧音声ミキサーは更新する（8～12入力）
⑨副調整室モニターはハイビジョン対応
⑩スタジオフロアに大型モニター3式
⑪照明設備は更新せず
⑫教室・アナブースのカメラは更新せず
⑬学内共聴設備は更新せず

本稿では文化情報学部における映像制作指導の現状と今後の課題を展望してきた。こうした専門分野の教育では、テレビ局等と同じ様に映像制作のためのスタジオ関連設備を備えることが必要になり、それが教育機関にとって大きなネックになっている。しかしその一方で情報通信技術の進歩により、ノンリニア編集やハイビジョンカメラなどは低価格で高性能な機材が出現してきた。関連する放送機材も大きな価格破壊が起きている。また映像制作を取り巻く環境に目を向けると、You Tubeなどの動画サイトの急速な広がりやインターネットでの動画公開、ネットCMの普及など、10年前には予想もできなかったほど映像作品のニーズや制作者の底辺は広がっている。こうしたなかで制作者は映像作品のなかでメッセージをどのような形で伝えるのか、映像コンテンツを制作するための具体的な手法やノウハウをどのような形で学生に指導するのか。これからの映像メディアはどのような役割を果たす必要があるのか。新しいデジタル放送時代に入った今こそ、教育機関における映像制作指導の意義と教育の質が問われていると考えられる。

本研究は平成19年度～平成21年度の椋山女学園研究費助成金(C)による研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 椋山女学園大学 文化情報学部サイト
<http://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/>
- 2) 中部電力「デザインの間」サイト
http://heart-bridge.jp/design_no_ma
- 3) 亀井美穂子、柗窪優二(2009)「ハイビジョン番組制作・編集のためのオンライン教材評価の試み」、椋山女学園大学研究論集第40号(社会科学篇) 63-70
- 4) 柗窪優二(2008)「デジタル放送時代のメディア教育に関する一考察」、日本マス・コミュニケーション学会、春季研究発表会要旨 27-28
- 5) 柗窪優二、亀井美穂子(2008)「ハイビジョン映像による教材DVDの開発」、椋山女学園大学 文化情報学部紀要第7巻 39-46
- 6) 柗窪優二、亀井美穂子(2008)「ノンリニア編集による

ハイビジョン番組制作指導の実証的研究」、第15回日本教育メディア学会年次大会発表論文集 119-122

とちくほ・ゆうじ / 文化情報学部教授

E-mail: tochikubo@sugiyama-u.ac.jp

かめい・みほ / 文化情報学部准教授

E-mail: kamei@sugiyama-u.ac.jp